

【共同研究】

老年期イメージとメノポーズに対する 女性の態度に関する研究

秋山 美栄子*・長田 由紀子**

Study on Women's Attitude toward Menopause and the Image of Old Age

Mieko AKIYAMA, Yukiko OSADA

The purposes of this study were to examine the relationship between women's attitude to menopause and her image of the old age. Women around the menopause age were classified into three groups, the first group having positive image of old age, the second group having negative image against old age, and the third group having neutral image, and the three groups were compared.

A sample of 776 women (ages 36 to 65) completed questionnaires about attitudes toward menopause, including (1) evaluation of menopause, (2) fear against menopause, and (3) feelings toward stopping of menstruation. The image of old age was evaluated by dividing the image into five levels from "positive" to "negative".

The results were as follows.

1. As for the evaluation of menopause, the attitude of the majority was neutral. There was a tendency among the group having a "negative" old age image to have a negative evaluation of menopause.
2. A majority answered that they do not feel much fear against menopause. There was a tendency among the group having a "negative" old age image to answer that they feel fear against menopause.

はじめに

更年期とは、女性の加齢の過程において、「生殖期 (reproductive stage) から非生殖期 (nonreproductive stage) への移行期」であると定義された (First International Congress on the Menopause 第1回国際更年期学会, フランス, 1976年)。すなわち更年期は成人期から老年期への過渡期であり、45～55歳を中心に広く

は40～60歳が該当する。

同じく第1回国際更年期学会によると、閉経 (menopause) は更年期の間に起こる最終月経を意味し、平均閉経年齢は51歳と報告されている (筒井, 1989)。一方、WHOのResearch on the Menopause (1980) によると、閉経 (menopause) は、卵胞活動性の消失による永久的な月経の停止であるとされ、12ヶ月以上無月経が続けば閉経が起きたと判定されることが多く、月経が自然に停止する期間を指す用語として用いられている。

また、更年期症状については、更年期のあいだにみられることがある症状 (symptoma-

* あきやま みえこ 文教大学人間科学部人間科学科

** おさだ ゆきこ 聖徳大学短期大学部

tology)で、卵巣機能の低下、社会・文化的な環境要因、性格など心理的要因の影響が指摘されている。

実際、メノポーズに関しては偏見も多く、「自分自身についてはそう感じないが、一般的に言われている」メノポーズ神話を、多くの人が列挙することが可能であったとNeugarten(1963年)は報告している。それは例えば「女性は皆、人生のふしめで憂鬱になる」、「更年期の女性はしばしば自己中心的になる」、「閉経後の女性はもはや本当の女性ではなくなる」などである。

日本の更年期女性の研究を行ったLockは、「更年期障害」が戦後問題化し、最近になって病気のリストに加えられた背景には、戦後の核家族化、都市化、伝統価値の喪失などが関係している、という新しい日本の神話について報告した(1988年)。すなわち、社会が考える更年期障害に悩む女性の第一のタイプとは、「時間をもてあまし、アイデンティティがなく、忍耐が不足する主婦」であり、第二のタイプは「統制されすぎて神経質傾向を持つ女性」であると彼女は述べている。

最近の更年期観に関する調査によれば、女性自身は更年期をそれほど否定的にはとらえておらず、根拠のない偏見をもつことも少なくなってきた。しかし、なおメノポーズを話題にする機会が少なく、情報不足や偏った情報に操作されて更年期に関する悩みを抱える女性も少なくないのが現状である。

メノポーズに対する女性の態度の研究としては、前述のNeugarten(1963年)が、「閉経は、女性にとって望ましくない体験である」、「閉経後はその数年前に比べて良くなる」などの質問を用いてメノポーズに対する態度尺度を作成し、45~55歳(C)を基準として、21~30歳(A)、31~44歳(B)、56~65歳(D)群と比較した。その結果、全体的に否定意見に同意するのは半数であり、C・DはA・Bより肯定意見に同意する傾向が見られたことを報告した。すなわち、年齢のみならずメノポーズの経験が態度に影響することを示唆し

た。中年女性は、更年期を「望ましくない期間」ではあるが一時的なもののみであり、若い女性に比べて閉経を大したことだとは思っていないという結果が示されたが、これに対しては「妊娠できなくなることは中年女性にとって大した問題ではないのではないか」と考察している。また、当時の心理学や精神医学の文献において『妊娠可能期間の終わりは多くの女性にもう一人子どもを産む気を起こさせる』と述べられていたのに対し、調査の結果その傾向は見られず、むしろ多くの女性は「やり終えた幸せ」を述べていたことを示し、更年期に対する誤った見方を指摘した。

Avis & Mckinla(1991年)は、メノポーズへの態度とメノポーズ状態との関係、およびメノポーズ体験後の態度変化を検討すること、メノポーズへの態度に関係する精神的・身体的健康変数を検討すること、メノポーズ前の態度と、メノポーズ中の症状との関係を検討することを目的に、マサチューセッツ女性健康調査の結果を横断・縦断的に分析した。45~55歳の2565名に9ヶ月毎、計6回にわたって行われた電話調査の結果、多くの女性がメノポーズに「救済」を感じていたが、とくに外科的手術で閉経した群にその傾向が強かった。メノポーズ後の女性は一般的にメノポーズに対して最も肯定的あるいは中立的であり、メノポーズを経験すると「救済感」がより強くなると報告した。また、メノポーズへの否定的態度に関連する主な変数は、抑うつと症状報告で、否定的態度を持つ人はより症状を訴え、抑うつになりやすいとしている。また、教育を受けた女性は、より肯定的態度をとることも示唆した。さらに、メノポーズ前の否定的態度は症状の報告に影響を与えていたことを示し、メノポーズへの態度はそれ以前の性質に関係していることを示唆した。そして、全体として生物学的な出来事である月経の停止が、その後の身体的・精神的健康に影響をもつことはほとんどないと報告した。

Greene は、25年間に行われてきた16の横断的な疫学研究結果をまとめ、社会的地位が低く、収入が低く、教育歴が低く、限られた雇用機会しか持たない(恵まれない)女性は、更年期に最も影響を受けていること、またメノポーズに対する否定的な態度、低い社会的サポート、夫婦関係の低さ、ストレスフル・ライフイベントや最近の死別などと更年期症状の間に関係があることを報告した。そして、恵まれない社会状況が脆弱性を高め、これに生理的・心理的要因が影響を与えて更年期症状に結びつくという脆弱性モデルを示した。

このように更年期に関する先行研究は数少なく、必ずしも結果が一致していない。更年期に生じやすいさまざまな症状には、卵巣機能の低下、社会・文化的な環境要因、心理的要因が複雑に関連しあって影響を与えていると言われている。卵巣機能の低下という身体的要因が影響を与えていることは明らかであるが、それ以外の要因については今後の研究を待たなければならない。

目 的

メノポーズ(更年期・閉経)は、中年期から老年期への移行期として重要な意味を持つ。また、メノポーズは加齢を示す象徴的な出来事と受け取られる傾向もみられる。エイジズムや老年神話など、老年期に対する偏見の存在が示すように、加齢による生産性の低下が価値の低下につながり、老いは否定的な体験と受け取られやすい。出産能力の喪失であるメノポーズも「産む性」としての女性の価値の低下を意味し、喪失体験としてとらえられるという側面もある。

そこで本研究では、更年期周辺における女性のメノポーズに対する態度と老年期のイメージとの関連性について、老年期イメージの明るい群、暗い群、どちらでもない群の3群について比較検討することを目的とした。

方 法

調査期間

2000年11月～2001年1月にかけて、調査票を用いて郵送調査を実施した。

調査対象

大学生の母親 287名[回収率：33.0%、平均年齢：48.5(±3.55)歳]、婦人団体や講習会等への参加者181名[回収率：40.8%、平均年齢：50.3(±4.56)歳]、調査会社に登録するモニター308名[回収率：93.3%、平均年齢：49.6(±3.22)歳；]で、あらかじめ調査協力の諾否をとった後、郵送調査を行った。以上の計776名(回収率55.7%)から回答を得た。対象者全体の年齢は36～65歳で、平均49.3(±3.76)歳であった。

調査項目

メノポーズに対する態度として、閉経に対する評価、更年期に対する危機感、月経がなくなることに対して強く感じることを択一式で質問した。

また、老年期イメージの評価については、「明るい」～「暗い」まで5段階で求めたが、検定を行う際には度数に偏りが大きく統計的に意味をもたないため、3段階に修正した結果を用いた。なお、結果を示すグラフには、そのまま5段階を表示している。

結果と考察

1) 閉経に対する評価と老年期イメージ

閉経に対する評価として、「閉経は、ご自身にとって良いことだと思われませんか、悪いことだと思われませんか」という質問に対し、良い・やや良い・どちらともいえない・やや悪い・悪い、の5件法で回答を得た。Fig.1に示すとおり、過半数が「どちらとも言えない(503名 65.2%)」と回答しており、「閉経」は回答した女性にとって良いとも悪いともいえない、中立的なライフイベントであることが伺える。なお、「やや良い」「良い」と肯定的な回答をした者は、220名 28.5%であった。一方、「やや悪い」「悪い」と否定的な回答をした者は、49名 6.4%であった(Fig.1参照)。

評価の結果を3段階(肯定・中立・否定)

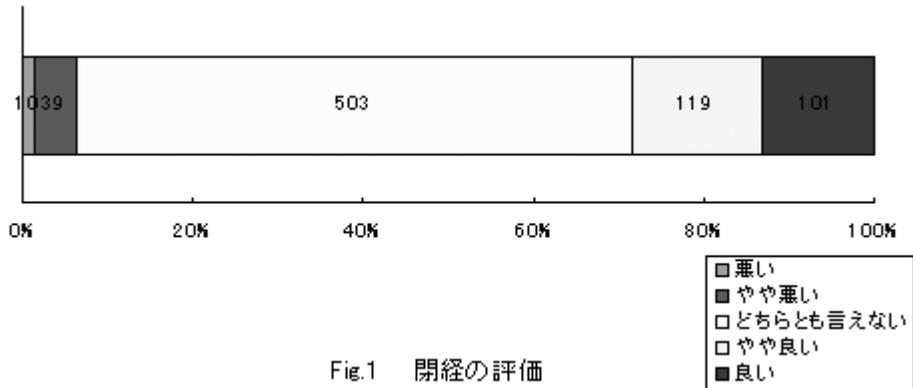


Fig.1 閉経の評価

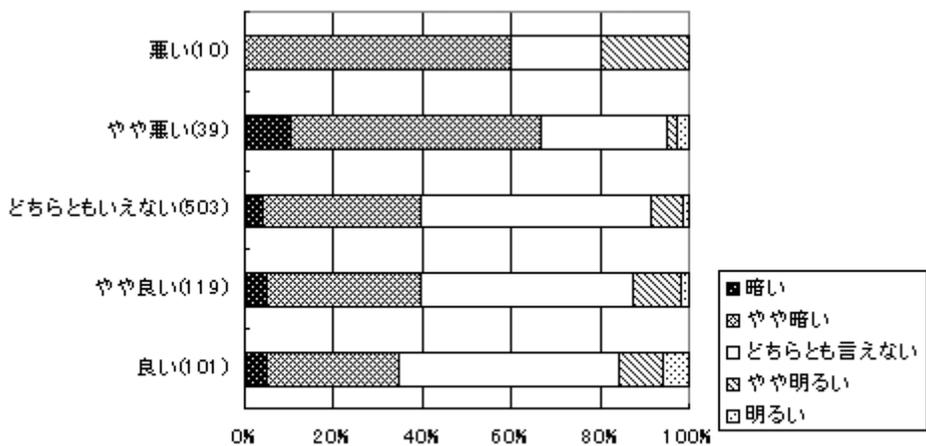


Fig.2 閉経に対する評価と一般的老年期イメージ

にまとめ、年代2群（50歳未満・50歳以上）との関係を検討した結果、50歳未満では中立が多いのに対し50歳以上では肯定評価が多く、50歳以上の女性に閉経を肯定的にとらえる傾向が見られた（ $\chi^2 = 7.81, df = 2, p < .05$ ）。

老年期イメージについては、「暗い」と回答した者が38名、「やや暗い」と回答した者が275名で、これらを合わせて暗い老年期イメージを持つ者が313名（40.5%）であった。「どちらとも言えない」と回答した者が381名（49.3%）と最も多く、約半数は中立的な老年期イメージを持っていることが伺える。そして、「やや明るい」と回答した者が64名、「明るい」と回答した者が15名で、これらを合わせて明るい老年期イメージを持つ者は79名（10.2%）

と低い数字であった。このように、更年期女性の老年期イメージは、中立的かあるいは暗いイメージをもっていることが伺える。

次に5段階の閉経に対する評価の結果と老年期イメージとの関連をみると、 χ^2 検定の結果、老年期イメージの「暗い」群に、閉経に対して否定意識をもつ傾向が認められた（ $\chi^2 = 22.16, df = 8, p < .01$ ）（Fig.2参照）

2) 更年期の危機感と老年期イメージ

更年期に危機感を感じるかに対して、「感じる～全く感じない」まで4件法で回答を得た。過半数の398名（51.6%）が「あまり危機感を感じない」と回答し、「やや危機感を感じる」（237名 30.7%）、「全く感じない」（105名 13.6%）、「危機感を感じる」（32名 4.1%）の順であった（Fig.3）。「危機感を感じる」

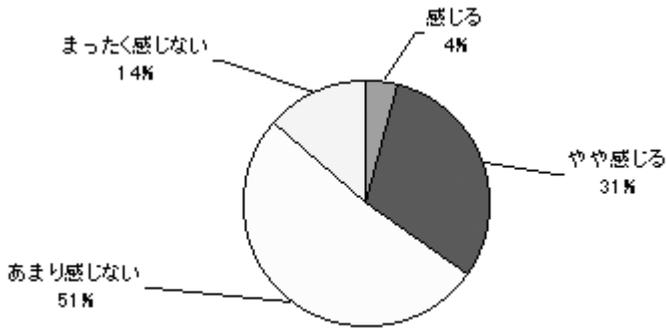


Fig. 3 更年期に危機感を感じるか

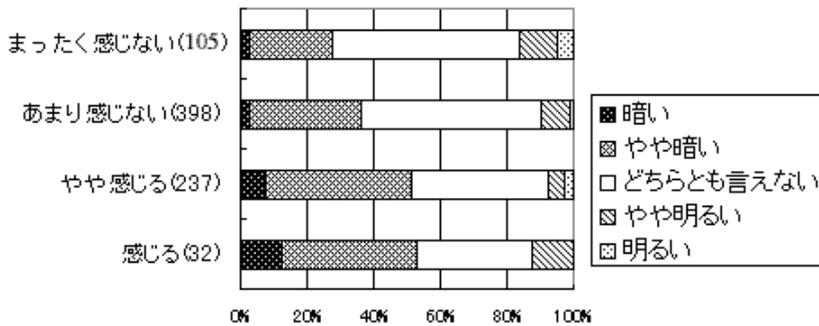


Fig. 4 更年期危機感と一般的老年期イメージ

「やや感じる」を合わせると、約35%が更年期に対して危機感を持っていることがわかる。

先行研究では『女の体と医療を考える会』が、2,953人の体験を報告している(1997年)。この報告によれば、「更年期について危機感を持つか」の質問に対し、[全然感じない...7.6%、大して感じない...36.0%、ある程度感じる...48.5%、重大に感じる...5.1%、無回答...2.8%]で、年代別では、年齢が上がるほど危機感が薄れ、50歳が境となっていると報告されている。本調査と比較すると、先行研究の調査に比べて本調査の結果の方が危機感を「(やや)感じる」と回答した者がやや少なかったが、これは質問の仕方の違いによるものではないかと思われる。

危機感を「感じる」および「やや感じる」をまとめて「感じる」とし、「あまり感じない」「まったく感じない」をまとめて「感じない」として、年代2群(50歳未満・50歳以上)との関係を検討した結果、50歳未満に、より危

機感を感じる傾向が示された($\chi^2 = 8.12$, $df = 2$, $p < .01$)。

危機感4段階の結果と老年期イメージとの関係を見ると、老年期イメージの「暗い」群の方が、「どちらとも言えない」および「明るい」群に比較して、危機感を感じると回答する傾向があることがわかった($\chi^2 = 27.92$, $df = 6$, $p < .001$) (Fig.4)

3) 「月経がなくなる」ことに対して感じることと老年期イメージ

「月経がなくなる」ことに対して強く感じることを9項目の選択肢を用意し、択一で回答を求めた。なお、回答の選択肢には、前出の『女の体と医療を考える会』の先行研究を参考に、予備調査を反映したものをを用いた。

結果は、多い順に「年だなと思う(192名 24%)」、「複雑な感じがする(173名 22%)」、「ほっとする(167名 22%)」、「大事なふしめと思う(118名 15%)」、「さびしく思う(44名 6%)」、「自由を感じる(38名

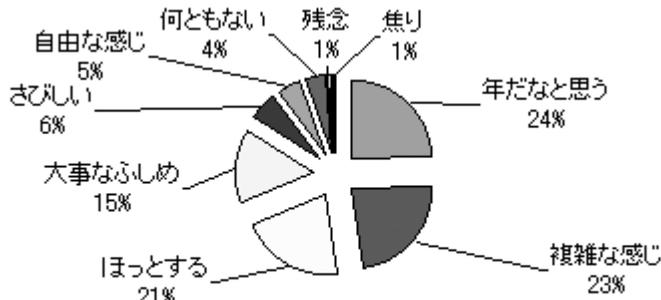


Fig.5 「月経がなくなることで感じること」 (n=776)

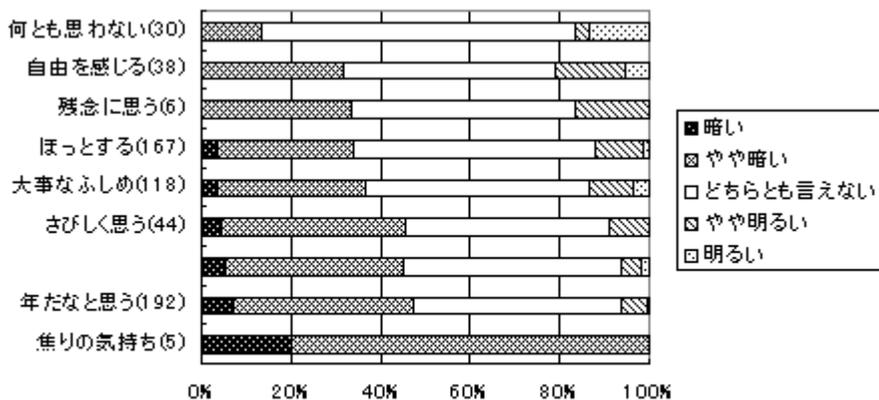


Fig.6 「月経がなくなる」ことへの感想と一般的老年期イメージ

5%)、**「何とも思わない」**(30名 4%)、**「残念に思う」**(6名 1%)、**「焦りの気持ちを感じる」**(5名 1%)であった (Fig.5)。この回答結果も先行研究の結果と類似していた。

老年期イメージとのクロス集計の結果は、Fig.6のとおりであった。**「焦りの気持ち」と回答した者は、全員が老年期イメージを「暗い」「やや暗い」と回答していた。**

まとめ

本研究では、老年期イメージの明るい群、暗い群、どちらでもない群の3群に分類し、メノポーズに対する態度との関連を検討した。老年期イメージの暗い群に、閉経に対して否定意識を持つ傾向、危機感を感じる傾向が認められた。月経がなくなることに対して「あ

せりの気持ち」「年だなど思う」に代表される否定的な印象を感じる者に、暗い老年期イメージを持つ傾向がみられた。また、「自由を感じる」「ほっとする」に代表される肯定的な印象を感じる者に、明るい老年期イメージの者が比較的多い傾向がみられた。そして、「何とも思わない」「大事なふしめ」に代表される中立的な印象を示した者に、中立的な老年期イメージが多い傾向がみられた。

これらの結果からは、老年期イメージの明暗と更年期の象徴である閉経への感じ方には関連があると予想される。すなわち、老年期に対して明るいイメージを持っている者は、月経がなくなることに対して肯定的な印象を感じており、閉経を迎える心の準備が既に成立しているように思われる。しかし、暗いイメージを持っている者は、月経がなくなるこ

とに対して否定的な印象を感じており、心の準備が整っていないと解釈できるのではないだろうか。

おわりに

本研究は、「更年期から老年期への移行期の女性における心身の適応に関する研究」の一部を、老年期イメージとメノポーズに対する女性の態度について検討したものである。調査では「更年期観」「簡略更年期指数(SMI)」「抑うつ度」「孤独感尺度」なども質問しているため、今後は広く他項目との関連を検討し、老年期と更年期の関連について考察を深めていきたい。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「更年期から老年期への移行期の女性における心身の適応に関する研究」(課題番号:11610156)の成果の一部である。

引用文献

- 筒井未春.(1989).心身医学的にみた更年期の臨床. 新興医学出版社、1-2.
- Neugarten, B. L., Wood, V., Kraines, R. J., & Loomis, B. (1963). Women's attitudes toward the menopause. *Vita Humana*, 6, 140 - 151.
- Avis, N. E., & Mckinlay, S. M. (1991). A longitudinal analysis of women's attitudes toward the menopause: Results from the Massachusetts Women's Health Study. *Maturitas*, 13, 65 - 79.
- Lock, M. (1988). New Japanese mythologies: Faltering discipline and the ailing housewife. *American Ethnologist*, 15(1), 43 - 61.
- Greene, J. G. (1992). The cross-sectional legacy: an introduction to longitudinal studies of the climacteric. *Maturitas*, 14, 95 - 101.
- 細谷憲政・杉山みち子.(1995).更年期の保健学. 東京:第一出版.
- 女の体と医療を考える会.(1997).どうする更年期:2953人の体験から.日本婦人会議.
- 長田由紀子・秋山美栄子.(2002).更年期から老年期への移行期の女性における心身の適応に関する研究.科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書.